



8x5 Anthology  
**Ivied Ruby**  
Side:Crimson



# “CRIMSON” CONTENTS

## ○小説

- ・ 秋陽 ..... p. 02
- ・ かめやま禅 ..... p. 06
- ・ KUKO ..... p. 08
- ・ 千代崎 ..... p. 14
- ・ とうみさな ..... p. 19
- ・ もちみ ..... p. 21
- ・ 來花 ..... p. 24

## ○イラスト

- ・ しまし ..... 表紙・p. 05・13・20・32・奥付
- ・ 千代崎 ..... p. 33
- ・ 悠汰 ..... p. 07・23・31

## ○コメント ..... p. 31

「…あなたが好きです…」

二週間くらい前、心地いいまどろみの中であいつの声が聞こえた。

それも俺が伝えることを躊躇っていた言葉で、うれしいって感情より先に都合が良過ぎると思った。だってそうだろう？好きなヤツと両想いなんて今までの人生を鑑みたらありえないことだ。ましてや俺と八戒は男同士な上に俺自身、女好きでとおっている。だから夢だつてことにした。でも、これがもし、夢じゃないなら…

ソファーに寝転がりながらリビングの掃除をする八戒の姿を悟浄は気づかれないように目で追う。あれ以来、妙に

意識してしまいギャンブルで生計を立てる者としてはありえないほど、露骨に不自然な行動を繰り返していた。まるで、初めて恋をした子どものような心境でどうにも調子が狂っていたからだ。そんな悟浄を不審に思った八戒はつい先日、何か悪い病気ではないかと医者に診てもらおうと言った。しかし、医者がどうにかできるものではないことを悟浄本人が承知しているため拒んだ。結果、飲み物とは言い難い色をしたお手製『栄養ドリンク』を飲まされトイレとお友達をする羽目になった。思い出しただけでまた腹痛に襲われそうになり溜息をつく。

仰向けになり天井へ視線を投げれば、いつそのこと白い目を向けられるのを覚悟で夢の話をしてしまおうかと考える。ふだんは、ニコニコと笑みをたたえて絵に描いたような好青年でいるが、いったん怒らせると突き刺さるような鋭い目つきに変わる。あの目つきを向けられるのかと思うと、何度となく肝を冷やしている悟浄は憂うつな気分になる。

「人を目で追ったり、溜息ついたり、おまけに百面相したりなんなんですか？」

脳みそをフル回転させている間に掃除は終っており、代わりに困惑気味な八戒の声が聞こえてきた。寝そべりソファを陣取っていた悟浄をコーヒーの入ったマグカップを二つ持つてのぞき込んでいた。心臓が跳ね上がるほど驚き、数秒固まってから口角を上げて無理やり笑顔を作る。

「い、いつの間に掃除終わったんだよ」

「そうですね、あなたが溜息ついたあたりにはもう終わってました」

大の男が表情をころころ変えている状況なんて想像するだけでものすごく滑稽だっただろう。恥ずかしさで頭を抱えたくなるのを我慢して体を起こし右側による。八戒はソファアの空いた場所に座ってカップをさしだす。うな垂れながらもまだ湯気の上る自分のカップを受け取り、とりあ

えず一口飲む。香ばしい匂いとコーヒーの苦味が口内に広がり一応の落ち着きは取り戻した。すうーつと横目に八戒を見れば相手もまたコーヒーをすすりながら、こちらに視線をよこしていた。悟浄は再び無理矢理の笑顔を作ると八戒の呆れたような表情が映った。

「慣れてきたとはいえ、最近のあなたの挙動不審な行動の理由をいい加減教えてもらえませんか？」

深いため息と一緒に出てきた質問に居心地の悪さを感じ、はぐらかすのはもうできないと悟った。

——— どうにでもなれ！

意を決して相手の方をむいて口を開いた。嫌われるのも、気持ち悪がられるのもこの際仕方がないと開き直り夢の中で聞こえた声の話をした。ついとばかりに今まで仕舞い込んでいた思いも洗いざらいぶちまけた。女を口説くみた

いにうまいこと言葉もそれらしい雰囲気にするのもできず、まったくもって不甲斐ない。こんな必死になって格好なんてつきやしない。本気で惚れているのだと改めて認識してしまった。

「つーことだ。それからここまで聞いて勘づいちやいると思うが俺お前のこと好きなんだわ。あーけど、あくまで俺の感情だからどうこうなりたいとはっ!!」

早口で話す言葉を遮るように八戒が悟浄を押し倒す形で口を唇でふさいだ。手からマグカップが落ちるのは阻止したが、唐突な出来事にただキスをされているのだという状況のみ理解した。しばらくすると息苦しくなってきた背中を叩く。

「あの…えと、えーと、その…すみません」

慌てた様子で唇を放されるとものすごく狼狽しており見

ているこちらが居たたまれなくなってきた。

「まさかとは思っていましたが、聞こえてたんですね。…僕でいいんですか？ 自分で言うのもへんですが、僕、けっこう独占欲強いですよ？」

「良いも悪いも好きだっつつてんだろう。で、俺だけに言わせんのか？」

悟浄はガラにもなく顔を赤く染めて八戒の頬に触れる。自分でも驚くほど穏やかな表情をむけ、聞かなくなっただけかっているが、やはり本人から直接聞きたくてややすねた言い方をした。お互い見つめ合う状態になっしまい、どちらからともなくクスクスと笑い出した。

「かないませんね。好きです、僕だけしか映さないようにしたくなるほどあなたが好きです」

少しばかり物騒な事柄は今は無視して満足そうに今度は  
悟浄からキスをした。

【了】



## 俺のものは俺のもの、お前の紅は俺の紅

かめやま禪

お互いを求め合った夜。

想いを遂げた後の気怠い空気の中、一服をしようと辺りを見渡す。

さっきまでの俺らを表わしているかのように折り重なる、脱ぎ捨てられた服たち。

「よつと・・・」

煙草を取り出そうと、ベッドから身を乗り出して上にのつた八戒の服を持ち上げると、そこらになにか紅いものがヒラヒラと床に落ちていった。

気になり手に取って元のベッドに戻る。これは――

「市場で昼間、高校生くらいの方たちが熱心に呼びかけしていたもので、つい。」

背後から回された腕に取り上げられたのは、『赤い羽根募金』の『赤い羽根』だった。

「げ。お前これ一日中着けてたのかよ。」

「おや、さっきあれほど僕の服を凝視していたのにそんなこと言うんですか？ よく見てください。シールの剥離紙ついたままですよ。」

「凝視って、ありや・・・」

――ありや、お前のいつになく雄っぽい姿に見とれてただけだ――なんて死んでも言いたくないから心の奥にしまっておくとして。

「着けちゃったら、なんだかもつたいないじゃないですか。」

「そういうもんか？」

「そういうもんです。だって一度貼ったら捨てちゃうじゃないですか。」

あいつが顎を俺の肩に乗つけてる所為で「じゃないですか」の部分が耳に直接吹き込まれたけど、断じて何にも感じちゃいないんだからな。その証拠に全く動揺しないで応答してやる。

「そりや仕方ねえだろ。」

「いえ。紅いものは捨てたくないの。」

紅いもの、か。



俺とお前を現実につなぎとめた色。

血の、色。

「なんか不思議な感じしません？ 僕らが散々「罪の色」

だの「戒め」だの言ってきた紅が、よりにもよってこんな平和的なものの象徴になるなんて。」

「・・・つまり八戒さんは何が言いたいわけよ？」

「いやあ・・・ただ

『綺麗な赤ですね。』

と。」

そう言って再び後ろから伸びてきた腕は、俺の頸を掴んで、ゾツとするほど優しいキスをくれたのだ。

分かってねえな、八戒。

お前が何を考えてんだか知らないが、俺は感謝すらしてるんだぜ？

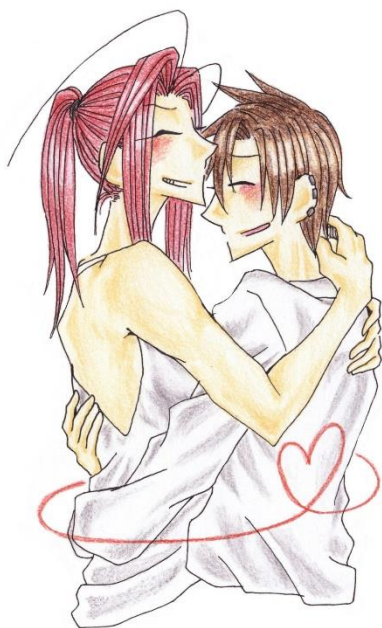
お前が綺麗だと思うようなこの紅をくれた親や、居るかも分らないカミサマって奴らに、よ。

そんな鈍感な八戒のために、俺は近くなったあいつの首を、両腕を回してさらに思い切り引き寄せてやった。

それに応えるように、俺の紅に差し込まれたあいつの指の熱さが

俺が手に入れた不格好な愛の証。

【了】



## 眠り姫は起こされる

KUKO

朝から衰えることのない土砂降りの雨のおかげで出発が延期になった。安宿の天井は薄くて、雨音が部屋中に響いている。

手持ち無沙汰を紛らすためにジッポを鳴らす。車にガタガタ揺られてると一日ゆっくり休みてえと思うが、いざこうなつてみると暇で暇で仕方ない。悟空をからかうのにも飽きた。悟空と三蔵は隣の部屋でそれぞれに過ごしてると思う。

目の前に座る八戒は本を片手にコーヒーを飲んでいる。一時間黙々と読み続けている。そんな楽しいのか、その本。

もう少しかまってくれても良いんじゃないの、とか思っている自分が痛くて煙草に手を伸ばす。あんなに嫉妬してたのが嘘のように涼しい顔をして過ごす八戒。もしや手に入れると飽きるタイプなんじゃねえかと疑っちまうくらい

だ。

八戒が顔を上げたので何？ と表情で示すと、眉根を寄せて俺を睨みつけた。部屋に煙草の煙が充満して、白くなっている。代わりにコーヒーを飲むと、いがいがした喉をコーヒーが絡まりながら落ちていった。

「眠れる森の美女っていうお話、知ってますか」

葉を挟んだ本をテーブルに置きながら、八戒が言った。

「魔女に呪いのかかったりんご食わされて眠ってたお姫様が、王子様の真実のキスで目覚めるってやつだろ」

「林檎を食べて倒れるのは白雪姫です」

「白雪姫と眠れる森の美女ってちげえの？」

「全く違う話です。魔法の鏡や七人の小人が出てくるのが白雪姫で、魔法使いや紡ぎ車、茨が出てくるのが眠れる森の美女です」

「俺の頭の中では全部が同じ話の中に出て来るぞ」

「ある意味器用ですね」

「良いんだよ。大事なのは『真実のキス』ってどこなんだからよ。そこさえあつてりや問題ねえよ」

「悟浄に似合わない響きですね。その真実のキスって、童話では存在しないんですよ」

「あ？ どういうことだ」

八戒は眼鏡をくいつと上げて手を組んだ。この一連の動作は俺のお気に入り。理知的で繊細で策士で、それでいて大胆なことをしてのける八戒らしい動きだと思う。

「有名な話はアニメ版です。大きく違うのは魔法使いの呪いと、最後ですかね。原作の童話では、『王女は錘が刺さって死ぬ』と魔法使いが呪いをかけ、それを他の魔法使いが『百年の眠りにつく』と訂正する呪いをかけたことになっています。そして最後は、王女が眠りについてから百年後にその噂を聞いた隣国の王子が城を訪れて、目を覚ました王女と恋におち結ばれるという話です」

「ちよつと待て。それじゃたまたま目を覚ました時に居合わせた男と結婚したってだけじゃねえか」

「そうなりますかね」

「それもきつちり百年眠ってたら意味なくねえか」

「そこだけで作品を判断しないで下さいね。原作には原作

の良さがあるんですよ。呪いを掛けた理由を話し忘れまし  
たね」

「そこはいいよ。面倒だから」

まあそうなのかもしれないが。魔法使いは願いが叶ったのだから良かったのかもしれない。それに王女も死んでないわけだし、目覚めた瞬間恋におちたんだし。良いことだらけって気もする。いや待てよ。王子と結婚したなら年取ってねえよな。それって都合よくねえか。

「アニメを作る時には設定を変えたんですよ。ねずみさんで有名なところが制作したものです。まずは王女にかける呪いを『十六歳の誕生日日没までに糸車で指を刺して死ぬ』と変え、訂正する他の魔法使いが三人の妖精のうちの一人になり『死ぬのではなく眠るのであって、真の恋人からのキスにより目覚める』と訂正します」

「キスされない限り永遠に眠り続けるってことか。それじゃ待つてらんねえな」

「ううん」

一度咳払いをすると、少しトーンの低い優しい声で話し

出した。

王女の生誕を祝う宴で呪いをかけられた王女は、城を出て三人の妖精の手で森で育てられることになった。十六歳の誕生日。誕生日パーティーのために苺を摘みに出掛けた。そこで王子と出合いお互いに惹かれ、その日の夜に再会を誓う。しかし呪いが実現し王女は眠ってしまふ。魔法使いは王子が呪いを解くことを恐れて王子と妖精を城の地下牢に閉じ込めてしまふ。妖精は王子に真実の剣と美德の盾を授け、王子は地下牢を抜け出して王女の元に向かった。が、途中ドラゴンとなった魔法使いに妨害される。王子は見事にドラゴンを倒し、何とか王女の元に辿り着いてキスをする。王女は目を覚まし、二人は結ばれて幸せに暮らした。

「何か自分が子供になったみてえだ」

「今度絵本を読んでもあげますね」

「その本に書いてあんの」

「いいえ。これはホラー小説ですから。こっちの方が気になりますか」

「遠慮しときます。で、何で急に眠れる森の美女の話なん

かすんだよ」

「いえね、一目惚れってあるのかなと思って」

「あ？」

「このホラー小説も一目惚れから始まるんですよ。幽霊の一目惚れです。自分が見えていない相手のためにつくして、結局血なまぐさく、無惨なことをするんですが」

「そっちの話はいらないから」

「はいはい。眠れる森の美女だつてどっちにしてもそうでしょう？ 二人が同時に一目惚れしてるんです。場所や時が違つても、一瞬で恋に落ちることは変わらないんです」

「まあな」

「一目惚れした相手のために命をかけてドラゴンに挑むんですよ。そんなことであると思いますか？」

「目を覚ました女がすげえ綺麗で手を出したつてのはあんじゃねえのか」

「やめて下さい」

（一目惚れねえ）

夜の相手を見付けるのだつてある意味一目惚れだと思ふ。

ピンと来るって感覚だろうか。お互いに目線とか表情で探りながら「いける」なんて感じるわけだ。

でもそれは、心の中で一夜だけとか今日だけっていう意識があるからで、明日のことなんて考えていない。もちろんまた会おうなんて言うこともない。

つまり恋に落ちていない。

だったらあの日、あの時はどうだったか。

「僕は違います」

「ん？」

「目が覚めて天井が見えてボロいなって思ってた。そしたらあなたが顔を出した。赤い眼と赤い髪をしたあなたが。驚きましたね。色々なことに」

「まあ、そうね」

「それがいつからかわわっちゃったわけですが。で、悟淨はどう思いますか。一目惚れってあると思いますか」

いつも綺麗に上がった口角が楽しそうにひくついている。これは面白がつてる。もう何年も一緒なんだから、どうでも良いことを長々と話し出したら危険だってことくらい覚

えりやいいのに。学習能力ねえな、俺。

「さあな」

「さあな？」

不満そうな顔をして、勢い良く椅子から立ち上がって八戒が近づいて来る。普段着ている緑の服は脱いで、黒のアンダーを着た姿。その首もとに膨らみがある。

「付けねえの、これ」

八戒の首に掛かったチェーンを引っ張る。そこには俺が誕生日に渡した指輪がある。どうにか話を反らそうと、痛い所についてやる。

「壊れたら嫌じゃないですか」

強度が低いスフェーンという宝石と、オーダーで頼んだ蔦模様のリング。戦闘中に付いたら一発で壊れそうだが、運転中せめて部屋の中だけでも付けていて欲しい。

「付けろよ」

チェーンを外して指輪を掌に落とす。綺麗な色だ。

「で、一目惚れってあると思いますか」

無理だよな、こんな話じゃ。

「あるんじゃないの」

「悟浄は経験ありますか」

「どうだろう」

「今更かつこつけても無駄ですよ」

八戒の顔が近づいて反射的に目を閉じる。きつと眼は見  
ちやいけない。

雨の降る森の中で八戒を見付けた時。その眼を見た時。

それが俺にとつての「一目」だったわけだが、八戒にと  
つては汚いベッドの上に寝かされていて目が覚めた時に俺  
の顔を見た時だ。きつと絶望。俺の問いにありがとうござ  
いますと答えた響きは未だに耳に残ってる。

「勘違いしないで下さいね。悟浄は王子様じゃなくて眠り  
姫ですよ」

「…」

「だってそうでしょ」

八戒を起こしたのは俺だ、と言いたい所だが煙草をちょ  
つと我慢したくらいで八戒は勝手に起きて来た。

ずっとあの家で燻っているはずだった俺を、気が付いた

らこいつが引つ張り出していた。そう考えれば、目覚めさ  
せたのは八戒かもしれない。

「観念したらどうですか」

「…一目惚れかしんねえな」

「そうじゃなきゃ拾いませんよね。僕の勝ちです」

「いつだつてお前の勝ちだろうが」

「そうですね」

賭けも喧嘩も敵わない上に、腰まで砕けさせられる始末。  
いつだつて八戒には完敗だ。

「僕が本を読んでいてつまらなかったんですよ。それなら  
そう言ってくれば良いのに。ご期待に応えますよ」

八戒の手が差し出される。薬指には指輪が嵌められてい  
る。

「うつせえよ。やんなら早くしろ」

「可愛く無いですね、ふふ。好きですよ」

雨音は止まる気配がない。どんな音だつて消してくれる。

「そうそう。眠れる森の美女にはさつき話した原作版の続  
きとか、また違った展開の話とか色々あるんですよ。それ

がホラーのような物語なんです。後で教えてあげますね」  
やっぱり八戒は王子様なんかじゃなくて魔法使いだろ、  
って言うのは心の中だけにしておこう。

【了】



## 夜のくるまえに

千代崎

「あつつちい」

呻くようなその声に、手元の活字へ落ちていた視線を後ろへ向ける。ついさつき起き出してシャワーを浴びてきたばかりの悟浄が、ボクサーパンツ一枚でうろついていた。タオルを宛がった髪の手から何秒かに一滴、雫が滴り落ちてくる。

「コレ冷房ついてんのかよ？ 何度？」

「ちゃんと髪乾かして下さい。二十九度です」

「暑ッ苦しくてドライヤーも使えねーっての。下げんぞ」

「健康にも環境にも家計にもよろしくありませんから」

章末まで読み進めた本を閉じ、テーブルの上のリモコンをさっと奪い取る。そのまま有を言わずポケットに入れてしまうと、あからさま過ぎるぐらい悟浄の眉間に皺が寄った。

「……あー、ケチくせーの。ちつとの間ぐれえいいだろ」

「とか言つて、ずっとリモコン放さない気でしょう。ダメです」

体感温度に差があると言ったって、耐えられない程の暑さである筈はないんだから。少しは冷えに弱い此方のことも考えてほしい。

ちつ、と態とらしい舌打ちをかまされたかと思うと、不機嫌な足音に続いて冷蔵庫の扉を乱暴に開閉する音がした。全く、下らないことに限ってすぐ感情的になるんだから。

身体の動きが大仰になるほど長い髪は振り乱れ、床に絶えず水滴を落としてゆく。

そういえば、随分長くなつたなあ。すぐ伸びるなんて嘯いていたのは、あながち冗談でもなかったらしい。そのうえ今は水を吸って重力に流され、中心の分け目もへたつている。まっすぐ立ったら肩甲骨を覆うぐらいじゃないだろうか。正直この時期にあの色あの量あの長さは何よりまず鬱陶しく感じてしまうけれど。

「……というか、暑がる割に切らないんですね」



ペットボトルのキャップを捻りつつ戻ってきた悟浄が「ああ？」とかなんとか言いながら目を見開いた。指し示すように、手の届く位置に垂れてきた毛先を摘み上げる。「ああ」とかなんとか先程と大差のない返事をして、悟浄は一口だけ水を飲んだ。

「前にさ、お前がちよつと弄つたろ。ビミョーに伸びかけるとき」

「はあ」

生返事をしながら記憶を辿る。悟浄がセルフでばっさりやってしまった後、不揃いに伸びてくる髪を見かねて二度ほど揃えさせて戴いたつけ。

「なーんか拘ってたっぽいし。またテキトーに切ったりしたら怒んのかなーって」

ボトルを置いた悟浄が毛先を弄りつつ、ちらりと僕を見た。

ついさつき僕を睨みつけたその眼は、一転してなんだかあどけない。まるで親の機嫌を伺う子供のように。

「別に、怒りはしませんけど」

そう言いつつ、悟浄が髪を引つ掴んで億劫そうに鉢を入れてゆく様子を思い浮かべる。ああ駄目だ、絶対どこかしらおかしくなる。この人がガサツだからというより、後ろの髪なんて自分で上手く揃えられるものじゃないし。まあ普通は人に頼むだろう。床屋のおじさんだか馴染みのお姉さんだか——いや、これも却下。余計に駄目だ。論外だ。

「……確かに、ちよつと嫌です」

本当は、ちよつとどころじゃなく嫌だ。見知らぬ誰かにべたべたと触れられて、あまつさえ手を加えられるなんて。なるほど僕は拘っている。彼の髪型そのものというよりは、その維持を委ねられているという優越感とか征服感といったものに。

大体なんなんですかこの髪は。なんで放つときつぱなしの割にサラッサラなんですか。半妖ゆえの体質だったりするんですか。無頓着に見えて知らない間にお手入れとかしてるんですか凄く面白そうですその光景。それともやっぱり馴染みのお姉さんの仕業なんですか。だとしたら一度話し合う必要が——

「はつかーい」

気の抜けた声で我に返る。ずっと毛先を摘んだまま、検分するように見つめていたらしい。

慌てて指を離すと同時に、喉の奥で低く笑う声。どきりとした瞬間、悟浄が俯き、後ろに流れていた髪がばさりと此方へ落ちてきた。そこに背後の窓、カーテンの隙間から、西に傾きかけた陽光が強く差し込む。

僕じゃなくなつて息を呑むだろう。水の膜を纏つてしなだれる深紅の毛束が、光を反射させて細かく煌めくその光景に。

節くれだつた長い指が、髪にするりと差し込まれる。見せつけるような仕種でそれを後ろへ掻き上げながら、悟浄は片眉を上げて挑発的に笑った。

「シたい？」

「、」

どうにも厄介なのはこれだ。無意識に髪を弄ぶのは僕が彼を求めているサインだと、悟浄自身が感覚的に分かっていること。

「じゃガンッガンに涼しくしてくんないと悟浄もたない」

返事も聞かずに、リモコンを入れたポケットへと悟浄が手を伸ばす。

やつぱりそういう魂胆でしたか。まあ、確かに利害は一致したので構わないんですけど――

「ストップ」

咄嗟にそう制すると、面白いぐらい「びたつ」と悟浄の手が止まった。その隙に椅子から立ち上がり、後ろを向いてベランダに通じる窓へ向かう。

「薄暗い部屋に籠つてるのもなんでしょう？ いい天気ですし」

「……青姦？」

「違います」

いざとなれば汚れるのにも虫に食われるのにも抵抗はないけど、好んで外でいたいほど野性的でもないかなあ。

「ここで」と言いながらカーテンを左右に開け放つと、真つ正面から陽光が溢れ出した。

振り返ってみれば、いつそう強い光に顔をしかめた悟淨の髪はますます明るく、きらびやかに見えて。四角い日溜まりの中が、まるで日常から切り離された小部屋のように感じられた。

ずっと見ていたらどんなにいいだろうか。しつとりと重く色濃くなつた紅い髪が、光の中、白く暈けた肌に貼りつく様を。乾いたそばからまた汗に濡れて絡まり乱れゆく様を。

そして同時に思う。初めて見た「あの姿」と正反対だ、と。

灯りもない夜の道、霞みゆく視界の中では色なんて分かる筈もなく。すらりと伸びた細い背も、頬にかかる長い髪も、闇に溶け込む不気味な影でしかなかった。喻えるなら、お迎えに来てくれた死神といったところか。となると差し詰め今の彼は――

「天使ですかねえ」

「は？」

「あー、やっぱりナシで」

こんな不機嫌そうに凄むヤンキー面の天使が居ては堪らない。もちろん死神なんて器じゃないことも、初めて眼を見た瞬間に分かつてしまったけれど。そんなひとに血の色を重ねた僕は自分勝手だったのだろうか。はたまた、彼の内側に燦る血のにおいを嗅ぎつけていたからこそ、あんなことを口に出したのだろうか。

「ねえ、悟淨」

じりじりと肌を灼く陽射しを項に感じながら、悟淨の背に手を回した。大した抵抗もなく身体が此方に凭れかかる。ふわりと髪が舞った瞬間、鼻腔を擽るシャンプーの香りに思わず生唾を呑み込んだ。口を突きそうになる想いを抑えるのも、正直そろそろ限界だ。

「……髪、綺麗とか言われるの、嫌じゃないですか？」

綺麗な赤ですね――なんて遠回しな言い方こそしたけれど、はつきりと口に出すことは躊躇っていた。それが美しいことを認めてしまえば、欲望の対象であることを伝えてしまえば、あのと僕らを結んだ糸が切れてしまう気がしたから。

だから密かに思い切って尋ねたというのに、悟淨は「はッ」と脱力したように一声笑うだけだった。

「べーつに。そりやどーもってカンジ？」

何でもなさそうな調子で返された言葉は、きつと昔の彼からは出てこなかった物なのだろう。

いつからかは分からないけれど、僅かずつかもしれないけれど、わだかまりは確かに融け始めている。えにしの糸は、確実にその数を増して撚り合わさっている。容易く切れることなどない程に。そういうことなら、これからは幾度でも惜しみなく。

「綺麗、というか。……色っぽいです、すごく」

「……そ」

そりやどーも、とすら言ってくれない彼は素っ気なくそう呟いて、髪に口づける僕の頭をくしゃりと撫でた。

髪に、眼に、唇に、舌に、見渡す限り散らばる紅。ただ戒めの色だった筈のそれに、煽られるような感覚を覚え始めたのはいつだったか。

唇を離しつつ頭を支えていた手を滑らせ、湿った髪を撫ぜる。ここにいれば自然に乾くかな。傷んでしまうかもしれないから、後でちゃんとケアしないと。

——そういえば本当に髪の毛だけなのかなあ、紅いの。ちゃんと陽に透かして見たら、そこもかしこもうっすら紅かったりして——

「……んだよ」

「いえ、何でも」

額に汗を浮かべ始めた彼の機嫌をとるように、冷房を見ただこともない温度に下げた。

内緒で目の奥に焼きつけてしまおう。目映い光の射し込むうちに。

いとおしい色を隠してしまう、夜のくるまえに。

【了】

hot

とうみさな

さてと、買物に行きましようか。もう少しだけ運転しますね、お願いします。

それにしてもロッジがあつて助かりました。久々に屋根のあるところで寝られますね。近くに商店街もあつてよかったです。おかげで今日は夕食がしつかり作れそう。そうだなあ、がつつり肉料理にでもしましようか。もちろんあなたの分も作りますからね。それから、少し冷えるのであったかいスープでも作りましよう。

———そういえば、あの日も肌寒い日でしたねえ。

僕は本を読みながらゆつくりお風呂に浸かっていたんです。

そうしたら出かけていたはずのあの人が飛び込んできて……。

急いでいたのか呼吸も荒くて、しもやけで少し紅い顔。そして僕をじつと見るんです。まるで、子犬みたいな顔で。

なんだか可愛かったなあ。

なんて、あの図体に言うのもなんですが、あはは。

それから僕があがつてあの人の手を触れたらやつぱりちよつと冷たかったんです。だから、風邪をひかないように夕食はスープ作ったんですよねえ。

玉葱、人参、じゃがいも、キャベツ、ブロッコリー、セロリ、しめじ、ひよこ豆、ベーコン、それからホールトマト。具たくさんで栄養いっぱい……あの人みたいな紅いミネストローネ。

ああ、そうだ、今夜のメニューも。

【了】



## 殺し文句

もちみ

「う……?」

ぱち、と目が覚めた。自室の窓からはオレンジがかった光が射しこんでおり、夕暮れ時であることがわかる。と、そこで違和感。いつもならば口うるさい同居人が昼ごろに叩き起こしに来るのだが、今日はそれがなかった。よく寝た証拠に昨夜飲んだ酒は完全に抜けている。

昨夜も賭場で生活費を稼いできた悟浄が帰宅したのは朝方で、八戒が起きるほんの数時間前だ。ほろ酔いのまま自分の部屋のベッドに倒れ込んで太陽の匂いのする清潔なシートに顔を埋めて眠りについたことを覚えている。

寝過ぎたせいで怠い体を無理やり起こし、リビングに出て同居人の名を呼ぶ。しかし、返事はなく、窓の外に目をやっても姿は見えなかった。もしかして自分が気持ちよく寝ている間に何かがあり、出て行ってしまったのかとも考えたが、テーブルの上でジープが寝ているところを見ると

その可能性はなさそうだ。ラップのかけられた昼食がそれを物語っている。

とりあえず椅子に腰かけて家の中を見渡した。オレンジ色の光は徐々に赤みを増し、部屋全体を同じ色に染めていく。時計の針が時を刻む音とジープの寝息だけがこだまする空間がそこにはあった。

「(なーんか……)」

この、胸が苦しくなるような感覚は何だったか。切なさで息が詰まりそうになる。八戒はただ出掛けているだけで、すぐに帰ってくるとわかっているのに苦しい。いや、わかっているからこそ尚更苦しいのだろう。

そういえば昔にも、こんな気持ちを感じたことがあった。家族を支えるために一人で働くあの人が、赤い夕陽を背負って帰って来るのを待っていた時だ。寒くなり始めた冬の初めに少しでも体温を逃がすまいと沈んでいく夕陽を眺めながら一人で膝を抱えていたあの時。いざあの人が帰ってくれば可愛くない憎まれ口しか出てこなくて、守ってもらっているのに素直に感謝したことなんてないのだけ

ど、確かにあの時もこんな気持ちだった。

乱暴に悟浄の頭をかき混ぜる無骨な掌の感触を思い出したところでハツとする。ジープは夢の中で、今この家には悟浄一人。恥ずかしがる必要などなかったが、柄にもなく郷愁に駆られたのを誤魔化すように煙草を取り出した。静かな室内ではライターの石を擦る音ですらやけに耳にくく。

「ピーー」

「ん？」

さっきまで気持ち良さに寝息を立てていたジープが徐々にその長い首を持ち上げ、玄関の方へ顔を向けた。どうやら主が帰ってきたようだ。軽快な足音と共に紙袋の擦れる音も聞こえる。

主を出迎えようと羽を広げる健気なペットに倣い、立ち上がってその後が続いた。

「ただいまー。あれ？ 貴方までお出迎えですか、悟浄。」

わざわざドアの前に立っていた悟浄に八戒は少し驚いた

ようだったが、特に気にせず出迎えてくれたジープを撫でる。飼い主にひと撫でされると満足したのか、彼は再び自分の寝床に戻っていった。

その姿を追っていた翡翠が今度は悟浄を捉える。

「今起きたって感じですね。よく眠れたでしょう？」

僕が留守にしたおかげで、とおどけて言う同居人に、お前のせいでこっちは憂鬱な子ども時代に思いを馳せてしまったんだぞ、と見当違いな怒りを心の中でぶつけた。しかし、そんな怒りは欠片も本人には伝わっておらず、彼は自分が帰宅してから一言も発していない悟浄を訝しんで声を掛ける。

「どうかしたんですか？」

「んー…」

なんでもないと言うように曖昧な返事をし、買ってきた物を整理しているその背中に抱きついた。着痩せする体は意外としつかりとしていて、顔に似合わず鍛えられている筋肉を後ろからなぞるように撫で回す。

しばらく悟浄の好きにさせていた八戒だったが、黙って



いたかと思えば甘えるように擦り寄ってくるという、いつにもない様子に首を捻った。

「もしかして寂しかった、とか？」

「…違えよ。」

八戒が口にした「寂しい」という単語は、悟浄が感じた気持ちに思いの外しつくりきた。が、認めるのは癪だった。

顔を上げて少し距離をとると、わざとらしく期待外れだという顔をしてこちらを見る。

「それは残念。」

どこが。

ちょうど沈む夕陽が窓の高さと重なった時、先ほどまではオレンジ色だった部屋が真っ赤に染まる。思わず悟浄と八戒の視線がそちらに惹きつけられた。過去に散々と言っているほど囚われたその色も、今ではただ懐かしさを誘うだけだ。

少しの間、二人は窓の外を眺めていた。

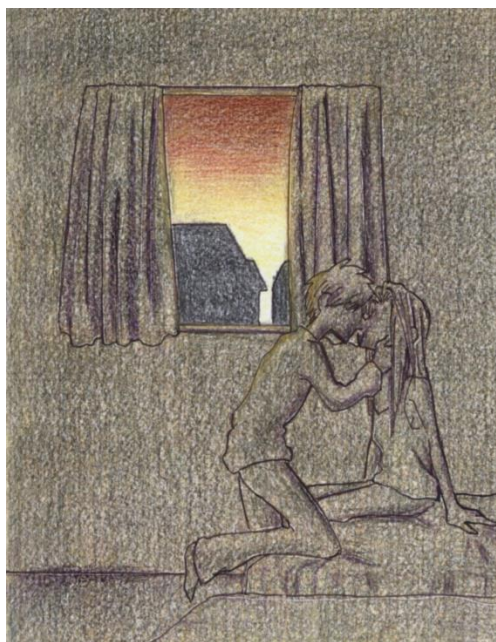
「ああ、悟浄」

目を細めながら差し込む光を見つめていた八戒が不意に悟浄の方へ向き直る。夕陽を背負った彼の顔は逆光で見えにくいがおそらくいつものように穏やかな笑みを浮かべているのだろう。そして、彼から見た今の自分はこの部屋と同じように全てが赤く染まっているに違いない。

「…綺麗な赤ですね」

そのせいで赤面してると思われていたとしたら、それは甚だ迷惑な話だ。

【了】



## 死ぬのなら幸せな方がいい

來花

肌を重ね合わせて八戒の愛情を全身でこれでもか、というほどに受けてガラにもなく疲れ果てて八戒の腕の中で眠って。気が付いたら八戒が俺を愛してくれている優しい眼差しを受けながら目が覚めて、「大丈夫ですか？」なんて聞いてくる。

「ダイジョーブ」

もういつしたかなんて忘れるくらいに回数を重ねてきたのにいつまでもそう聞いてくれる言葉にも愛を感じながら髪を梳く手に目を細める。

体はすでに清められて、違和感だけが事後の余韻として残るばかりだ。もう今夜はもつと、なんて強請れない。明日も早いし、八戒の睡眠時間を削るわけにはいかないから。

「幸せです」

「幸せ？ 何よ唐突に」

性的なそれを一つも感じさせないキスを俺の顔や髪、肩なんかには散らしながら八戒がより一層強く腕を俺に纏わせてくる。少し低い体温に安心するようになったのはいつごろか。少し寂しいと感じる夜でさえこの腕に抱かれさえすればそれだけで満たされる。

「大切な人が腕にいて僕の心を受け入れてくれて、明日も一緒に居られる。そう思うだけで幸せだって思えるんです」

「……そんなに？」

着衣の上からではそんなに感じられない厚い胸に顔を埋める。汗臭いけど八戒の匂いがする。余韻を残したままの体が熱くなりそうだ。

「ええ。たとえ貴方がこの先の旅の中で死のうとも死に目にはあえますし、亡骸とて僕が埋葬してあげられる」

そう言っただけの俺の背を撫でる八戒の背に腕を回した。こうやって自分から八戒を抱きしめればさらに安心して心が満たされる。

八戒が言う言葉の端々に姉であり恋人だった花喃さんの

経験から来る言葉や感情が読み取れる。でも、その言葉お前が言うとなんはシャレにならないくらい死にたくなる。

「じゃあ、今死にたい」

「…どうして」

怒りで言葉が凍てつくみたいに冷たくなる八戒の声に鳥肌が立つ。

「幸せな時に死にたい」

胸が苦しくなつて息苦しくなるほどに八戒の愛を感じる時が一番の幸せだ。だから今死にたい、八戒の目の前でこいつが望む形で、俺を看取つて、幸せな顔して死んでいく俺を。

「幸せな瞬間に意味も解らず死にたい。明日、明後日にも幸せはあるだろうけどそれがほんとに俺の望む形で来るとは限らないから、いらない。今、殺して」

いつか、望んだ。殺して、神様。と。その時は辛くて辛くて、絶望しきつていたと思う。でも、違う。今は幸せ、だから今死にたい。

「僕が、貴方に幸せだと感じてほしい。それが貴方の望ま

ない形であつても」

「八戒がくれるもの、八戒がくれる幸せはどんな形でも俺は嬉しい」

昏い表情をした八戒に口づける。八戒を愛することですてついた心を溶かした花喃さんはどれだけ八戒のこの表情を見ただろうか。いや、八戒にこの感情を植え付けたのは花喃さんだ。それならば少しは見ただろうから。でも、いっただつて揺さぶりを掛ければ見れるこの表情は俺だけのもの。ちよつとした優越感だ。

「悟浄…」

不安げに揺れる瞳を俺に向ける八戒にもう一度、口づけた。今は死にたくない、と思うから。だつてこんなにも八戒が俺を欲して愛してくれるんだから。もっと、こいつの隣で。

「でもそれは今じゃないかもしれない。いつかはわからない。結局死ぬってそんなもんだろ？」

口角を少し上げて見せれば八戒の表情が和らぐ。その顔も好きだから、まだまだ足りない。

「望むなら、こうやってお前の腕に抱かれて死にたい」

それは確実に思うんだ。

きつくきつく抱きしめてくれた八戒が言う。

「死ぬ瞬間は絶対に居てあげますから」

「うん、嬉しい」

背中を撫でる八戒の手に眠りを誘われて目を閉じる。

ああ、この瞬間だけを夢見ていたい。そして、今この瞬間に死にたいと強く願った。

（どうか明日も腕の中の体が温かくありますように）

【了】

## 俺とお前の我儘

來花

猪八戒という男は、俺を甘やかす。

久しぶりについた街で羽根休めという理由で数日間の宿泊を決めた宿で八戒は誰にも有無を言わずに俺と同室にさせた。

手早く荷物の整理や明日に買い出しをするつもりのレストランを作る。それを見ながら煙草をふかしていた。俺の煙草もそろそろ補充してもらわないとこれが最後の一つだ。

「八戒、俺の煙草も」

「わかってますよ」

きつと一番に書かれているのだろう。何せ、この俺を溺愛しているんだと声を大にして言うくらい男の事だから。

「さて、悟浄」

「なに？」

「髪の毛切ってもいいですか？もう、貴方の枝毛が気になって気になって」

「いいよー」

俺は別に気にしないのに八戒は俺の髪の毛の事を気にして毛先をそろえるくらいだけでも切りたがるし、シャンプーやリンスーなんかをかなり気にして買う。そして一緒に入れるのならば一緒に入って俺の髪を洗う。俺からすればいたれりつくせりなんけども、そこまでするか？ というくらいにそこまでする。

さささ、つと八戒が用意したいいつものセットに俺はされるがままになり、シヨキシヨキと髪の毛に刃が入る。

「お風呂も一緒に入りましょうね？」

「うん」

この間は煙草が吸えなくて困る。楽しそうに八戒は鼻歌を歌いながら俺の髪を梳いていく。少し軽くなる。

八戒の愛し方が俺を甘えさせるところまで甘えさせることだとして俺の愛情とはなんだろうかと、そんな難しいこ

とを考えながら風呂に入る。

俺の髪を洗い終えて満足そうにしている八戒に背を預けて浴槽につかる。俺の方がデカいはずなのにすっぽりと包むように八戒は俺の首筋に顔を埋めている。

ちよつと、煽られちゃっている俺だが見たいことがある。

「俺ってさー八戒をちゃんと愛せてんのかな？」

呟くように小さくそう発した声はよく反響する風呂場では拡大されて八戒の耳に届いたであろう。ただでさえ密着しているというのに。

ちよつとした間が空いて八戒がクスリと吹き出すように笑った。

「…んだよ」

「だって…おかしい…今更、なことを聞くんですもん…あーおかしい」

器用にも俺を後ろから抱きしめたまま体を震わせて笑う八戒に唇を尖らせた。そんなに笑うなつての。

「貴方が僕を愛してくれてるだのどうのこのよりは、貴

方はもうとつくに僕を懷に入れちゃってしてくれてるでしょ？ 僕はそれだけで十分なんです」

「そんな覚えはないけど」

「例えば、髪のを洗うときに…」

するりと八戒の手が俺の首に絡む。ゆつくりと手に力が込められていき息が苦しくなっていく。

「こうやって絞殺してもいいんです。それに髪を切るときだってハサミで貴方の喉笛を潰すように突き刺してやればいい」

右耳に唇が寄せられて囁かれて身震いする。殺されかかっているはずなのに体に熱がたまつて奥がうずく。まるでセックスをしているかのように頭の中が蕩けてきた。

「ああ…ごめんなさい。離すのを忘れていましたね」

手が解かれて一気に空気を取り込んでしまい噎せた。

「ヒュッ、はっはあ…あっ…んう…んっ」

必死に酸素を取り込もうとしたのに八戒にキスされて八戒に空気を与えられて、苦しくて涙が出た。何度も何度もそうやってキスされて八戒の唇から酸素を取り込む。よう

やく離れた時には意識が朦朧としていた。

「貴方はさっき僕に抵抗なんていくらでもできたはずなのにしなかったでしょ？ それだけ僕の事を許容してくれてるってことです」

「…んっ…分かった、から…」

八戒の言葉に頭がくらくらする。早くここから出て、もっと深く俺に触って欲しい。それこそ、頭ん中で何も考えられなくなるくらいに。

「上がりましょうね。このままだと逆上せちゃいますから」

「ん」

抱き上げて連れてってくれるのかと思ったのに八戒は先に出ちゃって俺に手を伸ばしてくる。そりや、一応は立てるけどさ、あんなことされた後だから力が入りにくいんだよ。

「八戒…このまま、ベッド行きたい」

「そうですね、ベッドでゆっくり寝ましょう？」

脱衣所で八戒に凭れきる。あんなことをしたのはお前だ

から、責任とれって話なんだけど、ってかベッドでいちやつきたい。濃厚な時間が欲しい。何でそんなのも察してくれないんだろ。いつもはお前からがつついてくるくせに。

「八戒……」

「はい？」

振り返った八戒を壁に押し付けて乱暴に口づける。触れるだけじゃダメ。舌を絡ませて深いところまで俺を犯して。強引にねじ込んだ舌に八戒は順応して俺のに絡ませてきて俺が八戒を犯していたはずなのに俺が犯されて。

八戒の体にも火をつけるべく剥きだしのままの八戒自身を太ももで擦りあげてやる。

「…んっ…」

「はあっ…ん」

間近すぎて焦点は合わないけども確かに欲情を目に宿した八戒がいて唇を解放してやる。

「はあっ…はっ…なんですか」

「しよ？ いっぱい、ちょうだい」

もう、無理だ。体に力が入らない。でも、八戒が欲し

い。八戒にもたれ掛るように抱きしめる。

「…しようがない人」

「はっ…はあ…」

ズルズルとへたり込む前に八戒に抱き上げられて、きつとこのまま俺はベッドへと連れて行ってもらえるのだろう。

八戒が欲しくて欲しくてたまらないのはきつと俺の愛情であり、我儘なのだろう。

（溺れるほどの）

【了】



## 執筆者コメント

○秋陽

読みかえして思ったのですが、これ告白大会でした。前回の続きになるように書いたつもりです。

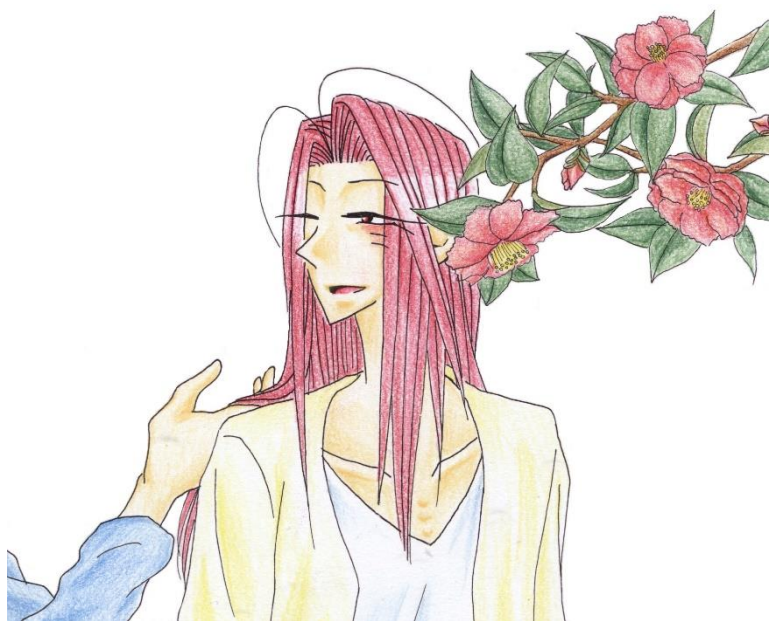
とても楽しかったのですが、こういった機会があれば参加させてもらえると嬉しいです。ありがとうございました。

○かめやま樺

今回の自分なりのテーマは「悟浄を受けらしく！」

・・・それが達成できたかはさておき、二人はなぜだか赤い羽根をきつかけにイチヤイチャしとります。謎シチュエーション。

短文ですがGREEN・CRIMSON両方参加でき嬉しく思います。読んでくださった皆様ありがとうございます！





## ○KUKO

読んで頂きありがとうございます。KUKOと申します。  
GREEN「嫉妬の楔」設定の短編です。残念ながらバカッ  
ブルになりませんでした。立ち直りの早い八戒さんとへた  
れな悟浄を楽しんでいただけると嬉しいです。アンソロジ  
ーに初参加出来て、楽しかったです。ありがとうございます  
でした。いつかまた。

## ○しまし

有り難いことに第二弾にも参加させてもらいました。私  
もまだどんな作品が集まっているのか知らないのですが、とに  
かく公開が楽しみで楽しみでもう想像するだけで…………ふ  
う…。

○千代崎

悟浄の髪にハラスメントして八戒に肅清されたい人生でした。文のほうは圧倒的に季節外れですみません。タイトルだけ前回と対になってます。

さて引き続き素晴らしい皆様にご協力戴きました。こんなすつとこどつこいにお付き合い戴きありがとうございます。思い切って企画して良かったです。八戒に幸あれ！

○とうみさな

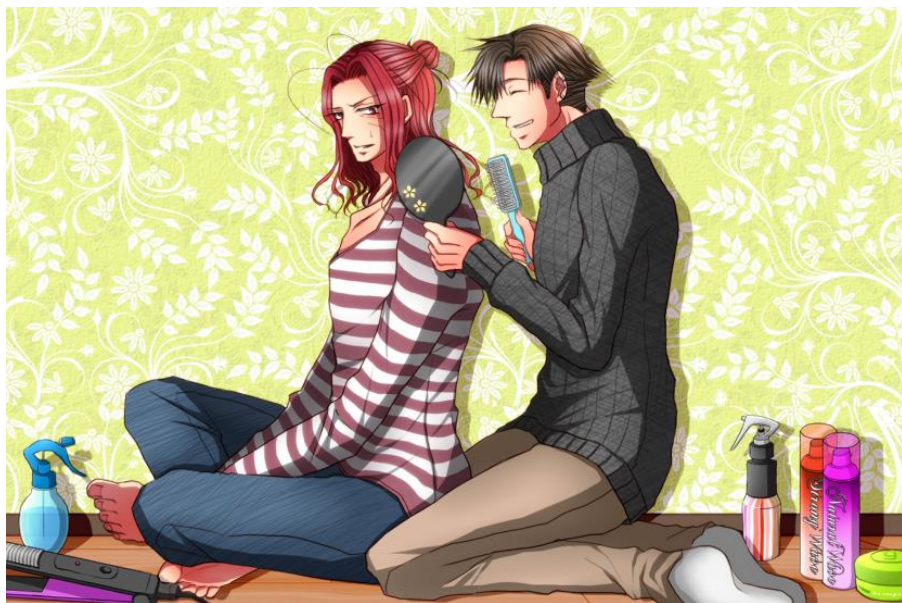
企画開催おめでとございます。

素敵な方々の中に私が混ざり大変恐縮です。

今回はV o l . 1 の話と対になるので合わせてお楽しみいただけると幸いです。

八戒、悟浄、峰倉ワールドについて話すときりがないのでまたどこかにいたら絡んでください。

参加させていただきありがとうございます。



○もちみ

GREENに引き続いてCRIMSONにも参加させて  
頂きありがとうございます。

“BE THERE”の八戒さんのセリフから。あれって  
かなりの殺し文句というか口説き文句だよなあとしみじみ  
思った結果の産物です。

若輩者ではありますが、また何かの機会にご一緒できた  
ら…と思います。

○悠汰

前回に続き今回も参加させて頂きました、ありがとうございます。  
素敵な八浄を沢山拝めて感無量です。八浄万歳！  
それでは…千代崎さん、皆さん、お疲れ様でした！あ  
りがとうございました！

○來花

今回も企画に参加させていただきありがとうございます。  
來花です。

八戒の方とは違ってほのぼのとした文は書けませんでし  
たがどうぞ、今回もよろしくお願いいたします。





『85 Anthology -Ivied Ruby- Side:CRIMSON』

2014 年 11 月 9 日発行

Ivied Ruby（代表：千代崎朱）

[chiyo858ktk@gmail.com](mailto:chiyo858ktk@gmail.com)



